
ポケットの中の幸せ

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットの中の幸せ

【Nコード】

N4586A

【作者名】

翠

【あらすじ】

何気ない日々を幸せに思える時。それは隼人のおかげ。「幸せ」心からそう思う。

（前書き）

ふとポケットに手を入れてみた時に思いついたものです。
ポケットの中って意外とあつたかいんですよね・・・

このところ雨が続けている。
髪が跳ねて困る。

手鏡を見てふてくされる私。

「奈美！」

振り向くと隼人が部活を終えて階段を駆け上がってきたところだった。

「ごめん。片付けしてたら遅くなった。」

と、息を切らして言う。

「いいよ。別に。そんなに待ってないし。」

「そっか。なら良かった。」

安心したように微笑む隼人が好き。

本当は結構、待っていたけど気にならなかった。

隼人が私の手を握った。

「寒かったろ？」

そう言つて隼人は私の手を優しく温めてくれた。

「ありがとう。」

俯き加減に私が言うつと隼人は少し顔をあげて微笑んだ。

言わないけど、隼人は私が雨の中、早くから隼人を待っていたのを知っていたんだ。

隼人・・・好き

あの日、私はいつものようにサッカー部の練習を教室から友達と話しながら眺めていた。

一人、気になる人が居たから。

その人を目で追う。

「あつ、抜いた・・・」

思わず口から出てしまった。

「何？奈美また隼人君のこと見てたの？」

加奈子がニヤニヤ笑って言う。

「まあ、ここの席に座るのもサッカー部の練習見るためだしね。」

亜里抄も話を合わせる。

「うつ・・・」

言葉に困る。

「まあ、好きになってもう、一年半経つしね。」

亜里抄が続ける。

「一年半だよ？ろくに話もしてないのにそこまで好きになれる事に驚きだよ。」

加奈子も続ける。

「いいじゃん！好きなんだもん。」

ちよつとムキになって言うともたもや笑われてしまった。

二人が勝手な方向に話を進めていくのを無視して私はまた視線を校庭に戻した。

隼人は今度はボールを器用に蹴ってパスをしているところだった。頑張れ。声には出せないけど・・・。

こうして私はいつも放課後は隼人の姿を眺めている。

サッカー部の練習も終わり加奈子と亜里抄と帰ろうとしていた時、

「おい、藤田！」

クラスの森下に呼び止められた。

「何？森下。」

「ちよつとさ用があるんだけどさ、ほら、今日のHRの事でさ。先生がお前に頼めって。」

「ああ・・・明日じゃだめ？」

「ごめん。すぐ終わるからさ。頼むよ。」

「しょうがないなあ。ごめん加奈子、亜里抄、先に帰ってていいから。」

「待つよ。校門で待つとくし。森下あ、早く奈美返してよねえ。」

「ははっ。もちろん。」

森下は苦笑いを浮かべると「こっち」と言って階段を上がり始めた。森下の後をついて行きながらふと、この時間帯が好きだと思った。校舎にはほとんど誰も残っていないくて、少し冷たい空気。

校舎の中の独特の匂い。窓から見える校庭。誰もいない廊下に響く足音。

なんだかその全てが好きだと思った。

気付くと私のクラスの前だった。

「じゃあな。」

「えっ!？」

それだけ言つと森下は私を教室に強引に入れてさっさと行つてしまった。

「あの・・・藤田？」

囁くような緊張した声。

でも、しっかりと聞き取れる真っ直ぐな声。

ドキツとして振り向くとそこには隼人が立っていた。

頭の思考回路は完全に止まってしまった。

何か言うべき？

なんて言えばいい？

それしか頭の中には浮かんでこなかった。

鼓動が速くなっていく。

どうしようもなくて焦って逃げようとしたら腕を掴まれてしまった。

「待って!」

こんなに近い・・・

隼人の手が・・・

隼人の声が・・・

頭が真っ白になっていく。

「あのさ・・・藤田。俺、お前の事好きなんだ。」

その言葉の意味が分からなかった・・・。

あの時自分が何て言ったのか、まったく覚えてない。

でもパンクしそうな頭でもはつきり分かったのは隼人の照れた笑顔だった。

あれから二ヶ月たった今、私は前よりももっと隼人を好きになった。

隼人の声。

隼人の仕草の一つ一つ。

私の手を大切そうに握る手。

いつも前を見てる真っ直ぐな眼差し。

そして私に向けてくれる眩しいほどの笑顔。

好きで好きで仕方ない。

どうしようもないほど好き。

ありきたりな毎日が待ちどうしくて。

なんでもない日が大切に、ごく当たり前な日々を望んでいたりする。

その中に隼人が居るだけで私は毎日が幸せなんだ。

雨が降っていても、蒸し暑い日でも、すごく幸せ。

叫びたいほど幸せ。

だから今、この瞬間に

隼人のポケットの中に私の手があることを確かめさせて。

まだ、恥ずかしくて言えないけど・・・

私はこのポケットの中が、隼人の手の中がすごく好きなんだよ。

いつか言えるようになるまでは

隼人が何気なくしてくれるままでいよう。

ふと、隼人が口を開いた。

「俺さ、奈美の手握るの好きなんだよね。」

私は雨の降る空を見上げて微笑んだ。

幸せ。

（後書き）

最後まで読んでくださり有難うございます。

幸せなんて本当はよく分からないんですけど、

こんな感じだと思い書きました。

ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4586a/>

ポケットの中の幸せ

2011年1月7日14時49分発行